

## おかしはいかが？

夏休みに入ったら、毎日お手伝い。あかねさんと  
いっしょに、おしごと、おしごと。

タコカフェに人気が出て、おしごとはいつもいっ  
ぱい。なのに

「私、どうしてここににいるのかしら？」

目の前には大きな庭。座っているのは長い縁側  
庭の脇ではポルンが犬——忠太郎に乗って遊んでる。

「ん？ なんか言った？」

声のする方に振り返ったら、なぎささんが障子か  
ら顔を出してるわ。その後ろには、ベッドに腰かけ  
たほのかさん。机の上にはミップルとメップル。そ  
の周りにシークンがふわふわ浮いてる。

いつもの、ほのかさんの部屋。いつもの よ、ね。

「いいえ、別に」

笑って応えたつもりなんだけど、障子の向こうが

なんだか変な雰囲気 あら？

「そっち行っちゃだめポポ〜!!」

びっくりしたようなポルンの声といっしょに、ひ  
ざの上が重くなった。

「わわわ〜っ!!」

ポコン、ってなにかが頭に当たる感じ。ふわふわ  
の耳の感じ ポルン？

とっさに体の前へばっ、と両手を出したら、ちよう  
どそこに、白いふわふわが収まった。ふう。

「ポルン、いったいどうし !？」

後ろ向いてた頭を戻したところに、おっきな顔。  
まっ黒でまんまるな目が、私の前で見つめてた。も  
う、ほんとにキスしちゃういそうなくらいすぐそばで。  
息も感じないくらい、私の目をじっと見つめてる。

え？ えっ!!? ええっ!!?

「忠太郎？ ダメよ、ひかりさんおどかしちゃ」

背中からやさしい声がしたとたん、目の前がぱっ  
と広くなって、次の瞬間には庭の隅にとことこ戻っ

てく忠太郎が見えた。ふう、なんだったのかな、いまの え!?

「痛いポポ！ ひかり、痛いポポ！」

手の中の声にはっとした。私、思わず抱きしめちゃってたんだわ。

「ごめんね、ポルン」

そう言いながら、私はまた強く抱きしめないように我慢した。だって、庭の隅からこっちを見てる目さっきと同じなんだもの

\*\*\*\*\*

あっつい。

庭のすみっこにそのそ歩いてく忠太郎見ながら、あたしはぼーっとしてた。

障子にからだ半分よっかかりながら、目が部屋の中をぼーっと回ってる。

ほのかの部屋、あいかわらずエアコンかけないん

だよね。学校じゃかけまくりなのに。よくもつよ、まったくさあ

とんっ！

ん？

強いけど軽い音。すぐそばだ。

なんだろ？ って見てみたら、ひかりが立ってた。

なんだか、あせった目でこっち見てる。

「ん？ どこいくの？」

「ちよ、ちよっとお手洗いお借りしますっ！」

目だけ反対の方向ちらっ、と向くと、ベッドに腰かけたほのかがじっ、とこっち見つめてた。

「逃げた？」

「逃げたわね」

ほのかの目線が変わった。壁の向こうを透かして、ろっかの先を見つめてるんだ。

あたしも同じとこ向いて、その向こうを見つめてみ

た。目の先で、ぱたぱた、って足音が遠くなつて消えちゃった。

「ひかりつてさ、忠太郎、苦手だったっけ？」

壁の向こう見たまんまで思わずそう言ったら、とたんに後ろから、くすくす笑いが聞こえてきた。

右手で口を押えて、ふき出すの我慢してるみたいな顔したほのか。あたし、なんかへんなこと言っただけ？

「う、うめんごめん。忠太郎はね、ときどき

じいつと人を見るのよ。だから相手のほつがへんに考えちゃつてね、取り乱しちゃうの」

「あたしは、そんなことなかつたけどなあ」

ぷつ。つてふき出す音といっしょに、ほのかの笑い声が響いた。セミの音がちゅちゅく思えるくらいの。「なぎさは特別よあ。だって、忠太郎と一緒にときつて、なにも考えてないでしょ？」

あ。ようやく笑い終わったと思つたら、これだもんなあ。まあ、あたし相手じゃしょうがないか。

「ひつどいなあ、もう。まあ、そうかもしれないけどさ」

口の中だけで、くすくす笑ってる顔見てたら、もう怒れないよね。はあ。

「それだけじゃないけど、ね♡」

ん？ いまこつそりなにか言つたような気がしたけど、気のせい、かな？

それにしても、もう、限つ、界つ！

「あゝつゝいゝつつ!!」

廊下の方に頭むけて、ごろん、と転がった。木の廊下がちよつとだけ涼しくて気持ちいい。ああ、このままごろごろ転がってきたい気分

「だらしないわねえ。『合宿の前に、宿題半分終わらせるんだ!』なんて言つてたの、だれだったかしら？」

え、そーだよ。言つたのはあたしだよ。たださ、だれどさつ！

「それは、さあ、あんどきは、もちよつと涼しかったから」

「へえ、ちよつと暑くなると、約束やぶつちやうんだ。なぎさは」

顔が見えないけど、なんだか口元だけで笑つてるような声。ほのかつてば、まつたく！

「いじわる言わないでよあ。ほののくかあ」  
ん？

言った瞬間に、すーつとする。風がベッドの方から吹いてきたんだ。

「でも、お疲れさま」

起き上がった目の前で、ほのかがうちわ動かして。汗が、すーつと引いてくるな。

でも　そっか、お疲れさま、か。

「　　やっぱ、わかつちやつた？」

ちよつとだけ顔が赤くなるな。暑いだけじゃなくて。

「どのくらい一緒にいると思ってるの？」

去年なんて、そこでカエルみたいになつてたじゃ

ない。よくがんばつてるわ　いい先輩よ。なぎさ」

そうだよねえ、ほのか相手にカツコつけても、そりゃバレルよ。でもさ、

「いい先輩だつたらさあ、もうちよつと頼りにされてもいいと思わない？」

ひかりくらいには、ちよつとはカツコつきたいんだよね。まあ、無理なもんは無理、かなあ。

ほのかんとこ宿題してきたとき、タコカフェで見たひかりの様子、またおかしくなってるんだもんなあ。

今度はなに考えごとしてんだか

つつい、そのままこまで引っ張つてきちゃっ

たけど、いつまでたつても話してくれないし。あゝあ、先輩として、あたしの方が自信なくしちゃうよ。もう。

「うん、そうねえ　あ、そうだ」

え？

な、なんだろ、ほのかの目が輝いてるよ。これって、なんかヤバそうな気が

「ねえなぎさ、図書館行かない？」

図書館？ あ、ああ、そっか。涼しいところで宿題しよう、ってことか。

はあ、びっくりした。ほのかがあんな目するときに、なぐんかたくらんでるときだもんね。あたしの見間違いか。そっだよ、うん。

「いいよ。あ、でも、ひかりどうしょ？ つれてくにしてもさ」

困ったなあ。「ここまで引張ってきといて、帰れてわけにもいかないし。」

あれ？ 風が、止まった？

「そっよね。じゃ、お願いしちゃいましょっか♡」

ほのかが、うちわをベッドの上において、立ち上がったんだ。あたしの顔、じいっと見ながら、口元だけで笑ってる。ちよっと、これ、見間違いじゃないよね？

「お、お願いって だれに？」

びくびくしながら見てたら、ほのかはそのまま、あ

たしの脇をすり抜けてった。両手でメガホン作って

声をかけて、ゆっくり出てきたのは ええっ!?

「ちよ、ちよっとほのか、それって、マジ!?!」

\*\*\*\*\*

「私、どうしてこんなことしてるんだろっ?」

口からこぼれてきた言葉に、思わず自分でうなずいちゃった。ほんとに私、なんでこんなこと

もうちよっとで夕方。タコカフェは、まだ営業中。

なのに、私がいるのは、ほのかさんの家からちよっと離れた高い場所。

右手には河原、左手には家の屋根。土手の上には遠くまでまっすぐ続いている、細長い道。

ほのかさんも、なぎささんもないなくて、私ひとりだけで。

こんなところで、私なにしてるんだろっ

「ワフー!」

「ひっつ！」

声にびっくりして足元を見たら、黒くて大きな目がじつと私を見つめてた。

「ひかり、なに驚いてるポポ？」

胸のポシエットから顔出したポルンも、じつと私をみつめてる。　　そうよ、心配かけちゃダメよ、ひかり。

「なんでもないのよ。——それじゃ　　い、行きましょ、忠太郎？」

言ったとたんに、手に持った紐が少し重くなった。

\*\*\*\*\*

ああ、涼しい。

白いついたてをぼんやり見ながら、あたしは冷たい風を感じてた。

汗は、とつくに引いてる。　　だけど

カリカリカリカリ

耳に入るのは、すぐそばで書いている音。それだけ。

静か過ぎンのよ、ここってっ！

「あゝ」

「しっつ！」

口を大きく開けた瞬間、ほのかの鋭い目線が飛んできた。

「図書館で宿題するの、なぎさも賛成したでしょ？　　ほらほら、まだ1ページも進んでないじゃない」

ちえ。　　んなこと言ってもさあ

「ふふ。暑くても、おしゃべりしながらの方がよかつた？」

ちろっ、ってこつち見上げながら、口元だけでくすくす笑い。そりゃまあ、ほのかの部屋にいたってそんな、ぺちやくちやしやべってるわけじゃないし、同じなんだけどさ。

「それとも、やっぱり心配？」

うん。それは、あるんだ。

あたしたちじゃ話してくれないからって、忠太郎

にまかせつきりなんてさ。それでも、あたしは先輩なのかな、って思っちゃうよ。

「大丈夫よ。きつとね」

あたしが黙っていると、ほのかが目も上げずにサラッ、と言った。ほんと、あっさり言うなあ。あ、そっか。「ほのかには、やっぱりわかるの？ ひかりの心配なことってさ」

まっすぐ見つめながら訊いてみたら、ほのかがちよつとだけ顔上げた。

「ぜんぜん。見当もつかないわ」

ぺろっ、って舌出して

「なあにい〜!？」

あ。いつけない。思わず立ち上がった。

まわり中からは一斉に、『しーっ!』って声。しまったあ。

「はい、イエローカード」

笑うのこらえてる声の方見たら、あたしのノートに黄色いポストイットが一枚。

「3枚で退場よ。さ、がんばる♡」

しょうがないなあ

あたしは、しぶしぶまた口を閉じて、宿題のテキスト開いた。けど、

「忠太郎は、ひかり好きなのかなあ？」

\*\*\*\*\*

(忠太郎にまかせておけば、大丈夫だから——)

まっすぐな道をてくてく歩いてく忠太郎に引っ張られていたら、私の頭の中に声が聞こえた。

ほのかさんの言った通りだね。忠太郎は、ひとりでも、ちゃんとお散歩できるのよね

「まかせれば、大丈夫。かあ」

なんだか、いつも聞いている気がするわ。

なぎささんにまかせれば、大丈夫。ほのかさんにまかせれば、大丈夫。いま私がいなくなつて、大丈夫。え？

「あ、あら？」

気がついたら、腕が軽くなってた。ひっぱられていたはずの紐が、ぴたつと止まってるわ。

「忠太郎？」

紐の先に声をかけてみたら、道から河原に向かって土手をゆっくり降りようとしてる。あ、これって、ほのかさんの言ってた、あれね。

「忠太郎、トイシね？」

河原の砂利のところまで降りていってるんだ、って言ってたものね。ん。と。お箸で、つまんで、ビニール袋に入れるのだったわ。それじゃ、ビニールとお箸を持って、と。

そういえば、袋はそのまま、ほのかさんの家まで持ち帰るのよね。まだ折り返してもいないのに、ずっと持ってたんだ。ん。

あ、あら？ 忠太郎、いきなりまた土手を登り始めたわ。

「どうしたの、忠太郎」

言いかけた私の足元で、忠太郎が目だけ上を向いて私を見て。それからまた、土手を登っていった。紐に引つ張られながら土手の上の道まで登ってる間、なんだか自分がすごく情けなくなつたわ。

だつてまるで、『始末できないなら、しかたない』って言われたみたいなんだもの。

「やつぱり、私っていらぬのかなあ」

思わずこぼれた言葉は、吹いてきた暑い風に消えてつちやつた。

\*\*\*\*\*

「好きなのかなあ、つて？」

ノートになにか書きながら、ほのかが言った。

ああ、へんなことばつかよく聞いているなあ。

「ん、前から思ってたんだけどさ。忠太郎って、あんまひかりに甘えないでしょ？」

顔上げたほのかは、ちよつとひたいにシワよせて、



「それはそうだけど。うん 好きかどうかは知らないけど、嫌いじゃないと思うわ」

「へ？ なんで？」

いくらほのかでも、忠太郎と話はできないはずだし、ねえ？

「わたしの好きな人なら、忠太郎だって好きだからよ」  
あ、あはは。

にっこり笑つ顔見てたら、思わず力が抜けちゃったじゃないの。いや、まあそれがほのかなんだけど

あ、そ〜おだ

「そっかあ。じゃあほのか、藤P先輩は嫌いなんだ。先輩、忠太郎が引き綱持たせてくれない、ってボヤいてたもんね」

「それはぜんぜん別の話でしょっ!! あ」

よおし、引つかかった

「は〜い、ほのかにもイエローカード」

黄色のポストイットをペタつ、と貼り付けたノー  
トの影から、口をとがらせたほのかがジツつ、て目

であたしを見る。

と、思ったら、またにっこり笑った。けど、この笑顔、ヤバいような

「それじゃ、1対1ね」

ひいつ！ やめようよお、んなイヤな戦い〜!!

\*\*\*\*\*

河原から上がってきてからの忠太郎は、ゆっくり歩いていた。

背中に乗りたくつて、ポシエツトから飛び出しそうにしているポルンをなだめながら歩いてたら、

(ああ、いいよ。いっついで〜)

頭の中に、また声が聞こえてきた。

お昼過ぎ、タコカフェでなぎささんに誘われたとき、あかねさんが言った言葉。とつても軽い感じで、私を送り出してくれた けど。

私はほんとに、役に立ってるのかな？

夏休みに入ってから、一日中手伝ってるはずなのに。私って、なにも変わってないみたい。

笑って注文聞いて、笑って飲み物運んで、笑っておさら洗って　それしか、できないのかな？

ほんとに、ほんとうに私がいま必要なら、いまごろこんなところにいられないはずじゃないかしら？

「はあ　あ、あら？」

思わずためいきついた瞬間、手の中の紐がピン、と張った。

「忠太郎？」

紐の先を見てみたら、忠太郎が背中中の毛を立ててる。いまにも、なにかに飛びかかりそうな感じ。

これって、ひょっとして

「ポルン!!」

コンパクトを取り出そうと、ちょっと右手を離したとたん、忠太郎が跳ねていった　!

\*\*\*\*\*

「そつえば、そろそろ藤村くんも走ってるころね」  
机の端っこに置いた腕時計をチラッ、と見て、ほのかと言った。

ああ、そつえばそつだなあ。

前にほのかの代わりに散歩つれてったときも、この時間だったよね。途中で藤P先輩に会って、いろいろ話して

「代わりたかった？」

!?

「ば、ばっ!?!」

持ち上げた両手が机にぶつかる寸前、あたしははっ、と気づいて口押さえた。

まわりでチラチラこっち見てるけど　ふう、なんとか、か。

「ん、ギリギリでセーフかな？」

かな? って、ちよっとあ! !

もう、にっこりに笑っちゃってさ。おちつけなきさ。よあし。

「ちえ。いいもん。あたしだけさつさと幸せになつてやるんだから。ほのかなか、置いてっちゃんからね〜だ」

「なんですつてえつっ!!」

シート!!

「あー!!」

くくく。ひっかかった。

「はい、イエローカード」

ペタッ、ってノートに2枚目のポストイット貼り付けたけど、ほのか見てない。

真っ赤になって、下向しちゃってるよ。ったく、ちよとはからかわれる身も味わつてくらん、つての。

ん？

下向いた顔が、ちよつとふるえてる？

「おおい、て」

あ、やば。

「ト、トイレ行こう、ほのか。トイレ。ね、ね」

そうだよ。ほのかにこのネタはヤバいんだつたあ。あ〜っ! なぎさのアホたれ〜っ!!

\*\*\*\*\*

「うわっ、なんだ!? っつて、忠太郎かあ」

忠太郎が飛びかかった先には、ジャージ姿の男の人がいた。このひと、確か

「お、散歩かい？」

「あ、藤村先輩 ですね？」

出したばかりのホルンのコンパクトをポシエットに押し込みながら、私はなんとかそれだけ言えた。

「ははは、『ですね?』かあ うん。そうだよ。

なに、ほのかはまた病気なのかい？」

私が首を振つたら、藤村先輩が、あれっ、つて顔になつたわ。なんだろう？

「いえ、なぎささんと図書館で勉強するからって、代わりには散歩を」

ぼそぼそって説明したら、藤村先輩がいきなり笑顔になって、

「そっか。それでわざわざ、仕事中のタコカフェから呼び出されたんだ」

え？

藤村先輩が、私の胸を指さした。あ、ほんただわ。今まで気がつかなかったけど私、エプロンつけたまま来ちゃったんだ。

藤村先輩は、私と忠太郎を交互に見てから、私たち二人にこっと笑いかけてくれた。

「きみも、選ばれたんだね」

選ばれた？ なんのことだろう??

「忠太郎はさ、気に入った人じゃないと、綱を握らせてくれないんだよ。ほのかがまかせるってことは、それだけこいつが信じてるって証拠だね」

藤村先輩はそう言うてから、私にあいさつして、手

を振りながら、また走り始めた。んだと、思う。

なんだか頭が混乱してて、よく覚えてないのだけど。

\*\*\*\*\*

ふう。

トイレでほのかが落ち着くまで待って、やっと元の机に戻ってきたら、もう夕方もいいとこだよ。エアコン効いてるつてのに、汗だくになっちゃったなあ。でも、黙っちゃってるよ。ああ、あたしのせいなんだけど、もちよつとなんとか。そうだ！

「そういえばさ、ほのか。今年は、化学部で花火つくらないの？」

去年は結構おもしろかったもんね。ほらほら、乗ってきなさいよ

「ええ。教頭先生が、危険だから、つて。

あれ、炎色反応の実験にはびつたりなのよ。楽しめるし、合宿前に盛り上がるにはちょうどよかった

のだけど 残念だなあ」

「えんしょくはんのう？」

乗ってくれたのはいいけど いきなり専門用語  
かあ。こりゃたいへんだぞ。

「去年習ったでしょ？ イオンの同定につかう  
どうってい

「ん？ なに赤くなって って、こら。まあ変な  
こと連想したわね？」

しまった、やぶへびっ！！

っと思ったら、ほのかがいきなり、あたしの手を  
握ってきた。ん？

「ありがとう♡」

あゝあ、全部お見通しかあ。

あたしは、ほのかの手をぼんぼん、って軽くたた  
いてから、笑ってみせた。

「ひかりがいたら、もっと早かったんだらうけどねえ」  
頭をかきながらそう言ってみたら、ほのかが少し  
赤くなっ

「ん そうかも」

そうそう。なんたって、ひかりが来てから、ほの  
かの口からあの子の話を聞かないくらいだもんね。  
ああ、またひかりの笑った顔が見たいなあ。

「たのむよあ、忠太郎。マジでさ」

\*\*\*\*\*

藤村先輩と別れてから、私はずっと忠太郎に引き  
ずられてた。

どういうことだろう。信じられてる、って。

「忠太郎？」

軽く呼んでみたけど、忠太郎はチラっ、とこっち  
を向いただけで、またすぐ歩いていっちゃうわ。

忠太郎が、私を信じてる？ ほんとかしら。

先週だって、私がごはんあげようとしたけど食べ  
なくて、ほのかさんが食べさせてたし。

先々週なんて、なぎささんの手からクレープ食べ

ていたもの。でも 私があげても、食べようとしない  
 かった。逆に、私の口に押し込もうとしてたくらい。

(ふふっ。なきさは特別ね♡)

ほのかさんの言葉が、頭の中に響いた。

「特別 か」

そつよ。私は特別なんかじゃないわ。綱を持つてい  
 るのだから、きつとほのかさんに言われたから。し  
 かななくて持たせてるだけなの え？

なにかを踏んだような気がしたとたん、足首が、く  
 いっ、と横に曲がった。

「きゃっ!!」

いけない、って思ったときには、もう体が宙に浮  
 いていた。

踏み外しちゃった丸い石が、ゆっくり転がってゆく。

河原と川が、頭の向こうに見えてくる。

「ワフツ!!」

最後に聞こえたのは、忠太郎の吠える声だった。

\*\*\*\*\*

(おい。大丈夫か、ひかり)

あら？

気がついたら、私はなんだか奇妙な場所にいた。

周りを見ても、だれもない。だれも なのに、  
 声がしたわ。

(つたく、よそ見もいがかげんにしろよ。いつでも  
 助けられるわけじゃないんだからな)

助ける？ 私は転んで、河原に落っこちちゃったの  
 じゃ あ、いつけない!

「あ、ありがとう」

だめだめ。助けてくれた人に、まずお礼も言えな  
 いんじゃ、それこそ人に信じてもらえないじゃ

(礼なんて要らないよ。オレの方が言いたいくらいだ)

え？ いま、なんて??

(ひかり。きみは、『やるべきこと』を与えてくれ  
 たよ。

きみは、『守るべきもの』を与えてくれたよ。

だからオレのダチは、もうこの場所に来ても立ち止まらないで済むんだ。

ありがと。いくら感謝してもたりないくらいだ。

わからない。この声の人は誰なの？ 私が、だれかになにかを与えたって だれに？

(きみがオレのダチを ほのかを助けてくれる限り、オレはダチと同じように、きみを守ってやるよ)

ほのかさん!?

「ほのかさんを、助けてる？ 私が!？」

(わかってないのかい？ まったく、手のかかる妹だよな。でも 笑ってるひかりは、悪くない妹だよ。ほんとにさ)

口の中で笑いながらの声が小さくなって 小さくなって、そして、私の目が開いた。

目の前には、空があった。

横を見ると、土手の芝生。私は、土手の途中で寝

転がってたんだけ。

それじゃ、いまのは全部、夢 ？

「クウ」

「ひかり、どくポポ！ 早くどくポポ!!」

ポルンの声にびっくりして起き上がったら、すぐに、忠太郎がいた。

私が落ちるのを、こんな小さな体で受け止めてたんだ。小さな体で、私を助けて それじゃ、いまのって！

「クウ」 ワウ！ワフツ!!」

いままで小さい声で鳴いていた忠太郎が、いきなり起き上がって、土手の上に駆け上がった。いった。

そこで、私を待ってる。まるで まるで、妹にカツコ悪いところ見せたくない、お兄さんみたいに。「いもうと」

そっか。そうなんだわ。お兄さんだから、妹に世話されたくないんだ。

こんな考え、ばかみたいかもしれない。でもいい

わ。私を信じてるひとが、そこにいるんだもの。

「待って、今行くから」

\*\*\*\*\*

夏の夕日は暑いけど、タコカフェの灯りはあつた  
 かない そんなこと思いながら、私はバンへ歩いて  
 いた。

けど、途中から足がゆっくりになっちゃう。握つ  
 てる紐が、ピンッと張ったり、ゆるんだり。その先  
 で、忠太郎がときどき私を見る。

「ああ。ひかり、おかえり っ、どしたの？ 忠  
 太郎だけ連れてさ」

近くまで来たら、灯りの中にあかねさんが声かけ  
 てきた。お客さんもいなくて、ちょうどいいのだけ  
 ど、けど

「お散歩、頼まれちゃったんです」

「バンの窓のすぐそばまで近づくと、なんだか、び

くびくしちゃう。結局、半日もお手伝いしてない上  
 に、今月はお小遣いもないんだもの

でも、私はお礼したいんだ。いま。

「それで すみません、バナナクレープを、お小  
 遣い前借りで作ってほしいんですけどっ！」

私が言ったら、あかねさんの手が窓越しに伸びて  
 きた。

「思わずぎゅっ、と目をつぶったけど 頭に、く  
 しゃくしゃっ、て感じ？」

「もう、んなこと言っつんじやないよ、まったく！ ひ  
 かりがちやくんと笑ってくれたら、お客なんていつ  
 くらでも来るんだから。」

「はい、バナナクレープ」

「え？」

手の感じがなくなった頭を上げたら、目の前にき  
 れいなバナナクレープ。

お手伝い途中でやめちゃって、てっきり怒られる  
 と思ったのに



41 おかしはいかが？

「公園入ってくるときさ、ひかり、笑ってただろ？  
お代はね、それで十分。ほら、早く食べさせてやんなって」

お皿の上に乗ったクレープ見ながら、私はなんだかぼけっ、としちゃった。

そっか。笑うだけでよかったんだね。

いらぬように感じたのは、仲間はすれに感じたのは、みんな私が笑ってなかったから

私はそのまま、お皿をを地面に置いた。忠太郎のすぐ目の前に。

「さつきはありがとう」

忠太郎、くんくん匂いかいでから やっぱりそう。お皿をくわえて、私の顔に近づけてきたわ。

「ありがとう、忠太郎 にいさん？」

お皿がびくっ、てして、そのまま、私をじっと見つめてる。

そうよ。お兄さんだから、まず妹に食べさせようとするのよね？

「忠太郎にいさん、おかしはいかが」  
にっこり、いい顔で笑ってるのが、自分でもわかるわ。

ほら、お皿が地面に降りてゆく。そして うん。  
クレープ、食べはじめてくれた。

でも私、見ちゃったわ。食べる直前に、私を見てため息ついたの。

そう、きつと思ってるのよ。

やれやれ、困った妹だ、って♡

—おしまい—